

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と古今集に詠まれていますが桜の咲く時期は短く、桜祭りに興じるのも一興かと思えます。満開の桜を見るのも良いですが硬い蕾が徐々に膨らみ、そして咲き始めるその道程に教えられるものがあります。人生、諸々様々な結び付きがあり、縁の深さ重さを享受できます。昨日は昨日、今日は今日の縁、同じ日暮しの様に思えても森羅万象同じ状態は皆無です。そこに「二期一会」の教えが生きてくるのでしよう。佛教は此の世が縁で縁が結ばれているから存在するわけです。日本の四月は大きな節目、出発の時です。人生は山あり、谷ありですが失敗を恐れずに突き進もう、結果を恐れて手を出さなければ、後々まで悔いが残る事になります。転ばされても起き上がるダルマのように一に努力、二にも努力です。与えられた仕事、勉強は徹底的にやりましょう。ぐちをこぼして後悔の念」です。不可思議な力は死に物狂いで努力した時に生まれてくると思えます。唯、孟子様が言われたように「誠は天の道なり、誠を思うは人の道なり」です。妙義神社の石標にも「天必興正義、神必感至誠」とあります。天道に恥じる事のないように、悪の道に踏み入れれば身を落とす事になります。私達人間は心が不安定になりやすいものです。覆いかぶさる情緒不安定が修羅場を作りやすいものです。ましてや忿怒の状態であれば冷静沈着になるまで時を待たなくてはいけません。

山田恵諦師は人間を教育していくのに、伝教大師様は人の性格を三つに分類されたと申されました。①言う事も出来れば、行う事も出来る人。②言う事は上手であるが行いは今一つという人。③行いは立派にできるが言葉は上手でない人。」以上の三つを踏まえ信仰を基盤として指導し、人格をつくっていかれたようです。我々が日常的に罪を作り易いのは日常勤行式で懺悔文を称える中に出ている「身・口・意」の三つです。物事生かすも殺すも、この三つの縁の結び方次第できまると言っても過言ではないと思えます。例えば叱るにも「時と場所をわきまえて」諭して悟る我が身に成れる様な指導をしないと良い結果が出ません。三月十六日のニュース 広島県・江田島市のカキ養殖加工会社に於ける殺傷事件）原因が社長に怒られた事に由るとありました。社長の思いが社員に通じなかった事が大きな悲劇を招いてしまったのでしょうか。叱るとは諭す事です。物事は一つ間違えますと取り返しのない事になりがちです。体罰の問題も同じです。一五七号の重き心とはものごとくに惑わされない、真つ白な心でした。即ち、何時いかなる状態でも最良の判断が出来ることです。寺によく「脚下照覧」と書いてあります。足元から人格の形成が始まっているからです。

知足が大切なのに、経済の発展の為に形振り構わず大義名分を掲げ環境悪に走る傾向が何処の国でも見受けられます、がやがて足元をすくわれ生態に悪影響を及ぼすことになるでしょう。油掛地藏尊大祭の巡り（二十一日） 二十五年四月一日 善入院